

この前、中学校の国語の授業を参観した。ここ一月で、立て続けに中学校の国語の授業を見る機会に恵まれている。

中学3年生の授業だった。教材は、『故郷』である。いわゆる読解、読み取りの授業である。机の上には、教科書とノート、そして国語辞典があった。最初は、タブレットもあった。だが、授業者から、「後で使うのでいったんしまうように」との指示が出た。国語辞典があるのと、ワークシートがないのがよかった。

授業が始まった。よくあることだが、前時の振り返り、前の時間の復習というか、おさらいのようなことが行われる。この時間もそうだった。いつも思うのだが、前の時間の振り返りは、本当に必要なのだろうか。必要だとして、その方法が問題である。授業者が、「前の時間はこんなことをしました。こうでした」と一方的に話すのは避けたい。授業を見ている参観者にとってはいいのだが、生徒にとってはどうなのだろう。内心、「そんなことはわかっています」とはなっていないだろうか。少なくとも、生徒が考えてみたくなるような働きかけをしたい。その方策は、授業者の持ち味やキャラクターなどによって変わってくる。

この時間では、生徒に「～と思いますか?」「どうですか?」「ここもけっこうバラバラでした。ここをみんなに考えてほしい」と投げかけていた。わるくはない。授業者が、学習課題を黒板に書く。生徒は、それを見ながらノートに写す。学習課題は、『私』は『希望』が叶うと考えているのだろうか。」だった。『故郷』の授業では、よく扱われるテーマである。しかし、その表現は少しずつ違う。学習課題の文末表現が少しでも違うと、授業は変わるものである。それだけに、吟味に吟味を重ねて授業に臨みたい。できれば、「～しよう。」の Let's 型ではなく、「なぜ～なのか。」の疑問型か二択型にしたい。その方が、生徒の思考が促進される。考えやすくなる。加えて、学習課題には、少しの抵抗感があるとよい。「難しそうだな。でも、できそうだな」ぐらいのレベルにしたい。

まずは、個人で考えさせる。授業者は、「みなさんはどう思いますか?」と投げかけ、一人の生徒を指名した。その生徒は、「強く考えている」と答えた。その後、「自分の立場、考えを簡単にまとめてください。そんなにいっぱい書かなくていいので」と指示を出し、時間を5分間とった。5分ならばよい。まずは、自分の考えを書かせる時間を十分にとってほしい。たぶん、授業者は、生徒の負担感を軽減するために、授業の後半に書く内容との比較がしやすいように、「簡単に」とか「いっぱい書かなくていい」という指示を出したのかもしれない。だが、どうなのだろう。生徒の意欲や文章表現力を制限する必要があるのだろうか。5分間、全力で書かせた方がいいのではないか。「まだ考えがまとまっていない人、書けない人は、簡単でいいです。いっぱい書けなくてもいいです。授業の最後には、書けるようになりますから」などのようにしてはどうだろう。

黒板には、0から5までの目盛りがある。途中で、授業者は、「4ぐらいかな。そんなことを考えながら書いてみて」「自分の立場を決められれば」「理由も書ければ」とアドバイスをしていた。生徒は全員が取り組んでいた。ここが、ポイントである。まずは、全員参加を保証しなければならない。一人も取り残さない授業の最低条件である。全員が書いていたということは、授業の導入は、まずまずだったということだろう。導入は、コンパクトに限る。前時の振り返りに時間をかけ過ぎて、生徒の意欲が減退していくような導入は避けたい。導入に時間がかかると、最後の振り返りの時間確保に影響が出る。いい授業には、コンパクトな導入が付きものである。(次号に続く)